

大学の社会的責任を問う環境問題

若森章孝（21世紀の大学を考える会代表）

地球温暖化や生物多様性の喪失、原発や化石燃料の利用に依存するエネルギー問題、地球の限界を超えた廃棄物や過剰消費の問題といった地球環境問題に直面して、大学の社会的責任（USR）が問われている。関大生協は大学のこの社会的責任を「エコキャンパスの創造」というコンセプトで受けとめ、教職員や学生が学部横断的に環境問題について議論し実践的に取り組む場や機会をつくってきた。エコキャンパスの創造とは、本冊子に収められている池田敏雄元法学部教授の言葉を借りれば、大学が「地球環境問題の教育・研究拠点としての役割」を果たすことであり、「環境問題に実践的に取り組み、率先垂範、社会に有用な情報を発信」していくことである。

関大生協は、エコクッキングの開催や生ゴミ・割り箸の取り扱いなど、食を通して環境問題にアクセスするとともに、学部や学科に分かれている教師と学生が地球環境問題について考え発言し、問題意識を共有する環境フォーラム的な役割を意識的に果たしてきた。その一つが、21世紀の大学を考える会の呼びかけでおこなわれた「地球環境学研究会」であって、2004年4月に立ち上げられたこの研究会での議論の積み重ねが学部を超えた教員の協力による全学共通の環境科目、「食と環境」、「環境と社会」、「低炭素社会への道」の開講につながった。これらの環境科目は、今日、環境リテラシーが情報リテラシーと同じくらい重要であるという認識にしたがってそれぞれ複数の教員によって講義にされた。

生協発行の『書評』も環境フォーラム的な役割を担ってきている。2004年からのこの8年間に、全学の教員や学生、職員、さらに吹田市などの近隣の市民が環境問題に関する多数の論考を投稿している。そのテーマは、ゴミとリサイクル、地球温暖化や生物多様性の危機、食の安全や食品廃棄物、里山や千里山キャンパスの樹木などの自然環境、エコキャンパスといったように広範囲にわたっている。本冊子の編者は『書評』に掲載された環境関連論文の中から、「エコキャンパスの創造」、「吹田・高槻・関大のアメニティー」、「近畿の廃棄物・リサイクルと温暖化問題」、「食と環境」、「COP15とCOP10参加」という5つのテーマに関する論考を選考した。いずれの論考も読み応えのある力作である。『書評』誌が関西大学において果たしている重要な役割の一端をこれらの論考の再録から知ることができる。

関大生協の50周年記念の企画として刊行される本冊子『21世紀のエコキャンパス創造』は、以上のような環境問題のプラットフォーム的場を提供してきた生協の活動から生まれた成果を反映した構成と内容になっている。関大生協がエコキャンパスをつくっていくうえで今後も先導的な貢献することを期待している。（『関西大学生協同組合50周年記念冊子』2012年3月）